
明久とわたし（ワシ）と初デート？

暁 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明久とわたし（ワシ）と初デート？

【Nコード】

N27770

【作者名】

暁 巧

【あらすじ】

ひよんなことから、明久とデートすることになった秀吉。一日女の子でいるつもりが、普段の自分が出たりして：「上手くいかんの…」

最後は、優子も明久に！？…

(前書き)

スマートな明久。と、女の子な秀吉、時々いつものじじい言葉。
読み辛かったらすみません。

まとめたんですが、めっちゃ、思ってた以上に長くなりました。
明久達の言葉使いとか、色々。こうすればよくなるなど、ご意見、
ご感想お待ちしております。

そう…、たまたまじゃった。珍しく明久と2人で帰ることになったのじゃ。姫路や島田だけでなく、雄二やムッツリーニまでいないのは本当に珍しいことじゃ。

2人つきりで帰れることに知らずワシも…：浮かれておったんじやろうな。迂闊にも、あの明久の言っていたことを安請け合いしてしもうたのじゃ…



「♪」

「秀吉、なんだか機嫌がいいね」

「そうかの？」

「うん、スゴく」

気づかぬうちに、何かやってしもうたか！？

「もしかして、へ、変じゃったか！？　なんかしてしもうたか？」

「違うよ、全然変じゃないよ！　むしろ可愛いよ！　ううん、いつも増して可愛いなって思ったくらいだよ！」

「ワシ、は…」

男じゃと言おうとしたのじゃが、勢いをつけて喋っていた明久の顔が、ワ、ワシのすぐ近くまで来ておって、不覚にもどぎまぎして…

「どうしたの？ 秀吉」

「ふえっ？」

「なんだか顔が赤いよ？ 風邪？」

誰のせいじゃと……。んー…、そもそもこういう考え自体が…

「秀吉？」

「いや、その…そ、そうじゃ！ さっきワシとなんの約束をしたんじゃないったか？」

「え？ やっぱり無しってこと？ そっか…さすがに嫌だよね…」

明久の表情を見ておったら、なんだか居た堪れなくなった。話を聞いていなかったワシが悪いのじゃから、そのような顔はせんでほしい。

「明久」

何だか解らんが、約束は守ろう！ 男は約束を守るもんじゃからな。

「どんな内容だったか、今一度聞いておこうと思っただけじゃ。なに、約束は違「たが」えん。男に二言無しじゃ！」

「そっか、それを聞いて安心したよ。約束の内容だったね」
「うむ」

「秀吉って、いつもは休みの日にも練習があるでしょ？ 明日は、練習ないって言ってたから、2人でどこか遊びに行こうって」

「なんじゃ、そう——」

「目一杯綺麗にして来てねって」

「——じゃと!？」

「秀吉落ち着いて。言葉がおかしくなってる」

「そんなことよりも、ワシがどうしても、キ、キレイにするのじゃ！」
「だって、デート…だよね？」

「なっ！？」　デ、デデデ、デートじゃと！？　ワシは男じゃいつも」

「僕は気にしないよ？」

どきっとした。明久の真剣なその眼差しに、息が苦しくなった。
って！　何を考えておるのじゃワシは！　落ち着くのか、べ、別に、ワシと明久は…

「秀吉」

「ひゃいっ！」

声が裏返って、女子「おなご」のような声を出してしもうた……

「またね。明日楽しみにしてるから。秀吉の、為になると思うし。
時間と場所はあとでメールするよ」

「あ…う、うん…」

ううむ……。これであとには退けなくなったの……。

よし！　ワシも演技者の端くれ。精一杯、キレイな女子を演じ、
観客「明久」を楽しませようかの。

明日が、楽しみじゃ♪

「ん？　ワシは今、変なことを考えたような…」

まあ良い。明日の準備もあるのじゃ、姉上が帰ってくる前に衣装を借りねばの。

☆

準備は終わって、後は寝るだけなのじゃが……何だか眠れん。先程から何度寝返りをうったか解らん。

「……」

——「僕は気にしないよ？」

明久の言葉が頭の中で、何度も思い起こされる。何だか恥ずかしくなって、ワシは頭から布団を被った。顔も熱くなってきおった。

「——！」

なんか、布団の中で声を出してしもうた。…早く寝んと、遅刻して………ZZZ………

☆

へぴぴぴぴぴ！＜目覚ましの音に飛び起きた。

「！！ もう朝か……はあ……なんじゃ、全然眠れんかったの」

朝ご飯の準備をしていると姉上が駆け降りて来た。

「姉上おはようじゃ」

「おはよう。秀吉、ご飯もうできてる？」

「うむ。丁度今から盛り付けるところじゃ」

「手伝うわ」

「ん？ 今日の天気は雪じゃっ——痛い痛い痛い！？」 姉上、ワシの関節はそれ以上曲がっあゝあゝ！……！！！！」

泣いて謝ったところで漸く、ワシの腕が解放された。

腕を回して確認してみる……うむ、大事ないようじゃな。…それにしても……

「朝から、酷い目にあったのじゃ……」

「口には気をつけることね」

「むう…、なんとも理不尽な…」

「へギロッ！」何かしら、秀吉」

「姉上の姉弟であったことを誇りに思う」

いつも通りの朝食を済ませて、（ほぼ毎日、酷い目に会うのじゃ……多い時は——止そう。考えただけで、震えが止まらんのじゃ……）きちんと挨拶。

「「ごちそうさまでした」」

洗い物を終わらせた姉上が、カバンを持って玄関へと向かった。
何か用事かのう？

「じゃあ秀吉。私は出かけてくるから、後の戸締まりよろしくね」
「心得た。いってらっしゃいなのだじゃ♪」

「何か妙に機嫌がいいわね」

「そ、そうかの？」

「ま、いいわ。帰ったら聞くから」

顔に出とるのかのう？ …うむ…、これではいかな。今日が本番。準備の段階から戦いは、始まっておるのじゃ！ 明久にも楽しんでもらわんとな。

「まずは、弁当。そして風呂に着替えに――メ、メイクもせんとな。なな、何事も中途半端はいかんしの」

☆

「――♪ ん〜♪」

ワシは、鼻歌を歌ってしまうほどにリラックスしておるな。少し楽しみにしてしまっているのは、自分でも誤魔化せん。

〈Pr r r r r!〉携帯のアラームがなった。

「もう、そんな時間か…長風呂になってしもうたへくんくん」

ワシは髪の毛や脇の下など、自分の匂いを確認する。使い慣れたシャンプーの匂いじゃと自分じゃ気づかんから、姉上のを拝借じゃ。髪は、乾かしてから確認じゃな。因みに、体臭は大丈夫じゃった。臭うって言われれば、立ち直れん気がする…。も一回…洗おうかのう……

悩んだ後、結局あのままお風呂を上がってから自分の部屋に戻って準備を進めていた。

まずは、着替えからじゃ。上は、首下がゆったりとした腰下辺り

までのワンピース。下は、ダメージデニムのホットパンツ。左手首には誕生石のブレスレット、首にもワンポイントとしてシルバーのネックレス、先の方にはハートが2つ絡まったアクセントがある。髪は、アイロンとドライヤーで軽くウェーブにしてほんの少しのワックスとヘアスプレーでふわっとさせる。メイクも、化粧水やファンデーションは勿論、軽くアイラインを引いてからビューラーで睫毛を上げて（初めて長くて良かったと思ったのじゃ♪）マスカラを塗って、目元パッチリアイメイク☆ さらに、薄くチークを入れて、淡い色合いのリップを塗れば完成♪

服は姉上に、小物類とメイク道具は、演劇の物を使ったのじゃが…何が役に立つか解らんもんじゃなあ。

「後は…」

姿見を見ながらくるっと一回転。シャンプーも仄かに香るし、服装髪型も……チェックオッケーじゃ。一応明久対策（？）として、いつでもポニーテールにできるようにオレンジのシュシュを手首に着けた。

「それにしても……あそこまでメイクを楽しんだのは初めてじゃな——」

ワシは、言葉を言い直した。

「——初めてね。…うん……今日一日は、女の子……だから……」

☆

「早く出過ぎたかの？」

携帯を見てみると、11時10分を回ったところ。約束の時間は12時じゃから、……うむ、大分早いな。

あ。言葉使い。——うん。もうオッケーよ。

「ん？ 明久？」

もう来て——たんだ。

「え？ へキヨロキヨロ」

「……へじいーっ」

何で気づかないの！ いつも、一緒にいるのにっ！

「僕？……」

「へコクリ」そうよ？

話ても気づかないなん——

「でも、僕はキミみたいな綺麗な人知らないけど…」

「ええっ!？」

「こんなに綺麗な人と出会ったら忘れるわけがないよ」

うう……、やっぱり嬉しいな。

「明久、本当に綺麗な？ わたし」

「うん！ 芸能人か、モデル……あれ?… 僕、名前言ってないよね？ 何で…」

わたしは、可笑しくて笑ってしまった。仕方ない、少しいつも通りに…。

「ふふ♪ …心外じゃのう、明久？ 長年の友の顔を忘れたのかのう？ 同じFクラスであろうが」

「……………はい？」

「名前まで言わんと解らんのか？ ホント、バカじゃの。今日、誰と約束をしたのじゃ？ へニヤリ」

「ひ、秀吉！？ さん」

「なぜ“さん”を付けるんです？ いつもみたく、呼び捨てでどうぞ☆」

「へどきっ！ へあ、えっと…、秀吉」

明久に名前を呼ばれてから、お決まりのやりとりをする。というより、したかった。かな？

「明久、待った？」

「え？」

明久もすぐに理解してくれたようで、お約束を返してくれる。

「はは♪ ううん、全然。今来たところ」

「「あはは♪」」

2人して笑う。もうこれだけで楽しい。

「秀吉、行こ」

「……」

わたしは、少しほっぺを膨らます。

「? どうしたの?」

「き、今日は、デート…だよ…ね? だから、…手」

ちよっとしたワガママ。今日は、とことん明久に甘えよう。今日という日は、一度きりだから…

「あっ、その…」

「んっ」

ぎゅっって握ってくれた。明久の意外と大きな手。明久の顔が赤くなってる…多分きつと、わたしも。

昼までは時間があるので、腹拵えにゲームセンターへ。プリクラも撮りたかったしね。

「よし、もう一回!」

かれこれ、1時間はここにいる。

「明久、お昼にしない?」

「これだけやったら終わるよっ」

〈ガタン〉

「よし、取れたっ!」

「じゃ、ご飯にしょっか」

そう言ってわたしと明久は、移動する。勿論、手を繋いで。ゲー

ムセンター内での移動もこうしていた。プリクラの時は、自分でも驚くくらい大胆に、腕を組んだり抱きついたり、キスのポーズもした。さすがに、本当にやる度胸はなかったけどね。

「ねえ、秀吉。どこまで行くの？」

「この近くに丁度いいところがあるから」

☆

「いいところって……公園？……」

「そう」

「いや、でもお昼食べるんじゃない？」

透かさずわたしは、弁当箱を取り出した。

「はい。……えっと……お弁当作ってきたんだけど……食べてくれる？」

「ほほほ、本当にっ！？！？」

「うん♪」

嬉し恥ずかし、お弁当タイム。

どうしてもやっておきたいのは――

「あ、明久。……あーん」

「え？　ちょっ！？　ええっ！？」

「何で……嫌……かな？……」

「へブンブンブン！」そんなことあるわけがないじゃないか！　嬉し過ぎてどうしていいか解らなくなったただけなんだ。だから……あ、

あーん…へもぐもぐ…」

「ど、どう？」

「美味しい。秀吉はいいお嫁さんになれるよ」

「ホント！ 良かったあ…」

ちよつと待つんじゃ、ワシは何に対して喜んでおるんじゃ？……
両方…？

「いやいやいやいや。さすがに」

「さすがに？」

「え、いや、何でもないの」

「そ？」

「うん、他愛ないこと。そんなことよりも、次何処に行くか決めよ
？」

「次行きたいところは決まってるんだけど、開始までの時間がある
から、ウィンドウショッピングでもない？」

「それは構わないんだけど、…映画でも見るの？」

「ん、まあそんなとこ」

「ふうん…」

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

明久は、何だかんだ言いつつも、わたしの分の男子用おのこの服も見に
行った。わたしが勿論というのもおかしいんだけど、女性用の服も
見た。そっちの方が長かったのは、今は女子としてデートしている
からだと思いたい。

して、今わたしがいるのは、アクセサリーショップ。シルバーや

ゴールド、様々な宝石類の類いがわたしの目を奪い、心を鷲掴みした。――男だろうと女だろうと、オシヤレに興味があるのは性別関係無く、全世界共通と言えるからね。

（「秀吉、やっぱり女の子だね」）

「む？ 明久、今失礼なことを」

「あ。あっちの方に飾ってあるやつは、見れるのは今日だけだって。歴史的価値があるとかなんとか言ってたし、見てきたら？ そういった物を見ておけば、この先芝居するのに役立つかもしれないよ？」

「はぐらかされた気もするのじゃが……確かに明久の意見も一理ある。明久、ちょっと見てくる」

「いってらっしゃい」

「うん」

―― 明久 side ――

「秀吉は、まだ帰って来ないね。――あの、」

☆

「つい見惚れてしまった……ん？ ――明久、何を話してたの？」

〈ドキッ〉とした。危ない危ない。

「何？ って、……えっと、お姉さんが秀吉の綺麗な手を見たいってね？ お姉さん」

「え？ あ、はい！ お嬢様の綺麗な指を見たいなと思ひまして」
「は、はあ（お嬢様ではないんじゃないが、このような格好ではムリもないかの）」

「装飾映えする綺麗な手。あ、次回の作品参考までに見せてもらってもよろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ」

僕はお姉さんとアイコンタクトを交わす。軽く頷き合う。お姉さんは、用が済んだようですぐさま仕事に戻った。

「ありがとうございます」

「ちよつと他のところもまだ見たいから、次に行こっか」

「あ、うん」

「またお越し下さい」

—— 秀吉 side ——

30分ほど他を見て回ってから、明久が「携帯を落としたかも…」と、わたしの携帯電話を借りて自身の携帯にかけてみたところ、手が綺麗だと言ってくれたお姉さんが出た。そのお姉さんのいるアクセサリーショップに忘れていったようだ。お店の前を通ったところで、お姉さんが店の中から出てきた。

「あー、良かったです」

「すみません、どうもご迷惑をおかけします」

「いえいえ、気にしないでください。お客様の笑顔の為に、わたくし達は、頑張っているのですから」

「紙袋？」

「さすがに、これだと忘れませんか」

「ありがとうございます」

「明久、バカにされておらんか?……」
「え?」

(「おっと、いかんいかん」)

「いえ。明久、そろそろ時間でしょ? 次の場所へ連れてって」

「お安い御用さ」

「お客様、うまくいきますように」

「ありがとうございます」

「? ん??? ——〈ぼそっ〉解らん」

☆

「到着。秀吉、ここだよ」

「! 何と…」

明久に連れられて来たのは、予想だにしていなかった場所だった。

「劇場…。舞台を見るってこと?」

「そう」

「でも、今日公開されている舞台は、予約券でさえ入手困難な代物よ?」

「でもさ……ほら」

明久は何の感慨も無くチケットを取り出したが、わたしからしたら喉から手が出るほど欲しい物だ。素が出てしまうのは仕方ないように思える。

「!?! 抱かれてもいい!」

「ぶはっ!?!?! ひ、秀吉!?!」

「はっ!?!?! 興奮し過ぎて我を忘れてしまったみたい」

素を通り越してしまった……。知らない自分を発見じゃ……

「いいから、行くよ。開場開始しているみたいだから、混雑する前に席へ——」

「いらっしやいませ、チケットを拝見致します」

「はい」

「: はい、どうぞ。この半券は、持っていてください。再入場の際に必要ななりますので。ですが、極力上演中の場内への出入りは禁止となっております。他のお客様の迷惑にもなりますので、お控えいただきますよう、お願い致します。あと、半券をお持ちのお客様の中から3名様に、今回の舞台台本をプレゼント致しておりますので、彼女さんと最後までお楽しみください」

「「っ!?!」」

2人して照れて、言葉に詰まってしまった。面と向かって言われると……恥ずかしいなあ、もう。

その後すぐに移動したけれども、ホールに入った途端にわたしも明久も息を飲んだ。既にホールは、人でいっぱいだった。

「——もう人でいっぱいだね」

「さすがにワシも驚いたのじゃ……」

「クスッ」

「な、何じゃ？」

「何でも」

「？ まあ良い。とにかく、さっさと席に着くぞ。始まってしまう」

「慌てなくても大丈夫——」

「いいから行くの！」

ワシは、多少強引にも明久を引っ張って行く。

「はいはい♪」

心無しか、明久も楽しんでいるように見える。明久も芝居が好きなのかの？ だとすれば、ワシとしては、嬉しい限りじゃな。

☆

舞台は最高じゃった。何より、同じ演技者として心震えた。あれだけ感動させられるのは、凄いと思った。普段芝居を見ない明久でさえ、泣いていた。怒ったり笑ったりもしておったが……。しかし、人のことは言えんの。斯く言うワシも泣いてしもうたんじゃから。

「良かったね」

「うむ！ スゴく良かったのじゃ。あれだけの作品には、久しぶりに出会った」

「過去最高っていう謳い文句は、伊達じゃなかったてわけだ」

「そうじゃな。いや、今まで見てきた作品の中でも、一番やもしれん」

「そうなの？」

「そうじゃ。……色々考えさせられたし、の……」

「色々……。あの芝居のテーマって、確か“愛”……だったよね」
「そうじゃな……」

友愛、家族愛、恋愛……。その中には、同性との愛も含まれておった。何というか――

「複雑だね」

「え？」

ワシの考えを読まれたのか？…

「同性愛とか……姉弟の垣根を越えた愛とか……そこまで考えてなかった」

「たぶん、今日芝居を見た大多数の人間がそうであろうな……」

そうではなかったようじゃけれども…

「でも、さ…姉さんに、巫山戯ないでよ！　だとか、二度とそんなことしないで！　とか、言ったことあるし、顔も見たくないどころか、いなくなればいいって思ったこともある。…僕が覚えてないだけで、怒りに任せて口走ったことがあったかもしれない。本当に好きな人にそんなこと言われたら、…絶対に辛いよね」

「そう、じゃな…」

「…そのことを……姉さんのことを考えただけで、涙が止まらなくなったんだ……なんて酷いことをしていたんだろうって」

「明久……」

「……あ、公園だ」

明久とワシは、いつの間にか最初にお昼を食べた公園まで戻って来ていた。

「ふりだしに戻っちゃったね」

「うむ…。もうこのようなところまで、戻って来ておったのじゃない？」

「秀吉、まだ時間ある？」

「へコクリ」：大丈夫」

「だったら、お昼食べたところでもう少し話していかない？」

「うん、もちろん」

ワシと明久は、肩と肩が触れ合う距離で座っていた。

「ちょっと…なんていうか、愚痴っちゃったね。ごめんね？」 秀吉

「気にすることではない。嬉しかったしの」

「そ？ なら良かった（友達として、相談されたりすると嬉しいもんね）」

「うむ」

明久のあの顔は、外れたことを考えてそうじゃの…。

「じゃあさ…」

「ん？」

「秀吉のことも話してよ」

「えっ？」

明久に見透かされているのではないかと、思った。明久は、妙なところで鋭いからの。

「何か悩んでるでしょ？」

「何を言っておるんじゃない？ ワシは別に」

「舞台が終わったあとから、ちょっと様子がおかしかったからね」
「……」

「けれども、話たくないって言うんだったら、話さなくてもいいよ」
「う、うむ……」

「でもね、誰にも話せないって思ったら、僕に言って？ 話を聞くくらいなら僕でもできるからさ」

「明久……。うん、ありがとう……」

明久のこういうところが……

—— 明久 side ——

ゆっくりと秀吉が声を出した。

「……ワシは」

「うん」

「……」

あれ？ 続かない。どうしちゃったんだろう？

「？ 秀吉？……」

「……すう……すう……zzz……」

「寝ちゃったか……」

秀吉、疲れたかな？……ムリに女の子になりきらなくても、普段の秀吉で充分なのにね。倒れてきた秀吉を起こさないように膝枕して、なんとなく秀吉の髪を触りたくなって、眠っている秀吉の髪を梳かす。

「……本当に女の子みたいだね……。もしかしたら、その事で悩ん

でたりするのかな…?」

秀吉の髪を梳きながら色々考えていたが、日が暮れる前に家に帰そうと秀吉を起こす。

「秀吉、起きて」

「ん…む…? 明、久?…」

秀吉可愛いなあ、ホントに。

「おはよ、秀吉」

「! お、おはようなのじゃ!」

驚いてる驚いてる。秀吉が膝枕だって気づいたと同時に跳ね起きた。物凄い瞬発力。

「す、すまぬな」

そう言っ、慌てて髪を直す秀吉はとてつもなく可愛く、この姿をムツツリーニが見たら、滝のように鼻血を噴出させて、一大事になっていたに違いない。と、僕は確信を持って言える。何を隠そう、僕自身がどつきどきさ。

「ううん、平気じゃないけど平気だよ」

「何を言っておるのじゃ?」

「あ、いや、こっちの話。はは…。」

それよりも秀吉、そろそろ帰らないと不味いんじゃない?」

「ん? そうか?」

「うん、夜道は危ないからね」

「そうか…」

秀吉が少し寂しそうに見える。一人で帰るのが、心細いのかな？
…。って思ってたなら、秀吉がへぎゅっ」と僕の服を掴んだ。

「秀よ——」

秀吉は髪の毛をへくしゃっ」とした。さらに少し俯き気味だったので、秀吉の表情が見えなかったけど……けど一瞬、何だか泣きそうに見えた。

心配になって秀吉に声をかけようと思ったら、秀吉がへパツ」と服から手を離していた。

「何でもないんじゃない。ただ、明久をどきまぎさせてみようかと思つての。あ、そうじゃ。明久、一緒に写メを撮ってくれんか？ 今日の…記念として…」

秀吉に演技なんてされてしまえば、僕に見抜く術なんかない。それでも、今の秀吉が嘘をついているんだって解った。僕に話したくないっていうなら、せめてその顔をホントの笑顔にしてやろう。

「全然OKだよ、好きなだけ撮ろう」

「ふふっ、そんなに撮らんよ」

「はい、いくよ？ 秀吉」

僕は、大胆にも肩を組んだ。今日の秀吉は、…女の子。男友達としての写真の撮り方じゃなく、女の子として……

「あ、明久!？」

「秀吉、笑って。今日の記念。でしょ？」

「あ…うん♪」

〈カシャッ〉と写メを撮ってから秀吉に話かけた。

「秀吉、さ」

「な、何じゃ？」

「言おう言おうと、ずっとツッコまずにいたんだけど、途中から女の子の話し方じゃなくなってるよ？」

「！　しまった！　途中から普通に楽しんでしもうた！」

「いいじゃないか。秀吉は秀吉でしょ？　頑張って女の子でいようとして作られるよりは、秀吉が楽しんでもらえる方が嬉しいよ。勿論、女の子の話し方をした秀吉も魅力的だったんだけどね」

「うゝ！　……、もう、適わないなあ……明久には」

「どういうこと？」

「姫路や島田の苦勞が、身に染みて感じておるということじゃ」

ん？　ますます解らないんだけど。ま、笑顔になったみたいだし、いっか。

—— 秀吉 side ——

ホントにこやつは……

「秀吉。はい、これ」

「ん？　何じゃ？」

紙袋？　…　これをどうしろと……取り敢えず中身を……

「待って待って！　まだ中身は見ないで」
「は？」

「んと、できればお姉さんと一緒に見てほしいな」

「姉上と？ 別に構わんが…」

「ありがと。喜んでもらえると嬉しいかな♪」

お土産か何かかの？ いつの間に買っておったんじゃろか？…。

明久、存外に底が知れんのう…

「本当に家まで送らなくても大丈夫？ 僕だったら別に」

明久の気持ちは嬉しいのじゃが、離れ難くなりそうじゃしの…。

「明久よ、ワシは大丈夫じゃ」

「解った。そこまで言うんだから、本っっ当に気をつけて帰ってね？」

「あい解った。任せておくがよい」

「了解。じゃあ秀吉、…また」

“今日の秀吉”は…もういなくなるのに…。

「またね、明久」

まだ未練があったのか、最後は、また女の子として別れた。

「うん、またね？」

軽く紡がれる言葉とは反対に、心が重くなる。笑顔で去っていく明久に、自分はしっかりとした笑顔で手を振っていただろうか…。

「はあ……」

明久がいなくなるまで笑顔を絶やさなかったが、いなくなった途端に大きな溜め息をつく。

「秀吉？」

「！」

なぜこんなところに姉上が……いや、ともかく誤魔化さねば。別段、姉上は特に気づいた様子も見受けられん。ここは気がつかれる前に……

「他人の空似でしょう」

「ふーん。その服、私の服じゃないかしら？」

「何を言っているんですか、服なんて特注品でもない限り一点物つていふのはないですよ？」

「そうね。けれども、初対面らしい人間に着ている服を自分のだと言われて、そんな風に返すかしら？」

「わたしは、考え過ぎる癖がありまして……」

「そう言えば、今日の晩ご飯何か聞いてなかったわね？ 秀吉」

「うむ、今日は……はっ！」

しまったのじゃ！

「ひーでーよーしいー？」

「あ、姉上！ 後生じゃ、許し——」

「アンタ！ 何でそんな格好してんのよ……！！！」

「いや、その……」

「何よ？ ハッキリしなさい！ アンタ男でしょう！？」

………解っておるのじゃ、そんなことくらい……

「明久と……」

『デートオオオオオっ?!?!? アンタツ、変な噂が立つでしょうがっ!!!!』

そこまで過剰な反応を示さんで——もおお!?

「姉上! 腕の関節はそれ以上……」

「問答無——「あ」——何よ? 今さら何言ったって……」

明久が“綺麗だ” って褒めてくれたのに……。服が、髪の毛が……

「崩れちゃう……!」

「秀吉?」

「せめて、今日は、今日だけは! 一日女の子で……」

「秀吉、どうしたのよ?……」

そう……今日だけ……なん、だ……。いっぱいいっぱい、やりた
いことがまだまだある。それでも……

「今日っ……だけ……っうつ……きよ、うがつ、終わっちゃう!……」

もうダメだった。考えれば考えるほどに辛くなって泣いてしまっ
た。

姉上も呆れ果てているだろう……男の……クセに。と。

「秀吉……アンタ……」

「何っで、何でわ——」

その先を言う前に、姉上が優しく止めた。

「ストップ。ホント…バカね、アンタは」

「姉、上……」

「秀吉、アンタは後悔しないの？　って、もうどうしていいか解らない状態か…」

「……〈コクリ〉」

自分自身でも、これほどまでに明久のことを想っているなど、想像もしなかった。姉上の言っていた通り、本当にどうしていいか解らなかった。

そんな自分を諭すように、姉上が言葉を発した。

「吉井君ってさ…バカだけど、人の気持ちを大切にする人だっと思うの。アンタの方が長く一緒にいるんだから解るでしょう？」

「うん…」

それは、解る。すごく解る。

「秀吉、アンタの気持ちをぶつければ、吉井君は真剣に返してくれるはず…違う？」

「…それは……」

明久ならば巫山戯たりしないと、断言してもいいくらい…

「ふふっ♪」

「…姉上？」

「そういうところは、人として尊敬できるし、一人の男性としても魅力的かな」

「え？」

今、姉上は何と……？

「そういうところも含めて、好きになったんでしょ？」
「うん」

そう……そういうところも含めて、明久の魅力。

「なら、きちんと気持ちをぶつけてきなさい。いきなりだと驚くだろうけど、吉井君には」

「ストレートに言わないと伝わらない」

「そういうこと。解ってるじゃない」

姉上に話で、大分気持ちが楽になった。

「まあね♪」

「秀吉、言葉……」

「もう少し、女の子としていようって思ってた。……魔法は、12時で切れちゃうと思うけどね」

「懐かしいわね……アンタのその丁寧な喋り方」

「ふふっ☆ 明久がわたしに勇気をくれるから」

「そうなんだ♪ ——ん？ 秀吉、それは？」

姉上に言われるまで、紙袋のことを忘れてた。

「えっとね、お姉ちゃんと一緒に見てって明久がくれたんだ」

中身は……っと、紙袋がさらに2つ？……

「こっちは、お姉ちゃんのだって」

「ちゃんと別れてるんだ？」

「みたいだね」

「秀吉、せーので開けよっか」
「解った」

「「せーの：」」

「「メモと箱？？」」

お姉ちゃんと2人して箱も開けてみると、——リングが入っていた。

メモには、明久に電話をしろと書いていたので、電話をする。

〈P r r r r r : 〉

「はい」

「明久？」

「秀吉、プレゼント見てくれた？」

「うん：でもどうして：」

「今日のお礼かな」

明久の声を聞かせる為に、お姉ちゃんにも聞こえるようにする。

「けど、お姉ちゃんは」

「？（今は、女の子かな？）秀吉にだけ渡すとお姉さんに失礼かなって」

「だからって」

「それだけじゃないよ。もう一つの理由は、その宝石の名前を知ったからだよ」

「宝石の名前？」

「そう。名前は、双子金剛石「ツインダイヤモンド」だって。だか

ら、どうせならお姉さんにもって思ったんだ」

「「ツインダイヤモンド……」」

「それと、お姉さんと秀吉じゃリングのつける指が違うんだ」

「どういうこと？」

「秀吉のは、インデックスリングって言って、右手人差し指につけるリングで、集中力・行動力、自分の意志を強固にしたいとき。夢の実現へ前向きに取り組みたい人向きなんだって」

「そ、そうなんだ」

明久がちゃんと考えてくれたプレゼント…嬉しい♪

「で、お姉さんのは、ピンキーリングって言って、自己アピール。変わらぬ想い。好感度アップ——」

「はい？」

「ちょっと秀吉、寄越しなさい！——もしもし、吉井君！？ どういうことかしら？ 私がみんなから、その…き、嫌われてるって言ってるように聞こえるんだけど？」

明久に本性を曝け出すつもりなの？…

「えっと、それは、秀吉に対してしていることが原因だと…」

「う…っ！…」

「それを戒めにして意識することによって改善されるだろうし、お姉さんも元々可愛いんだから、絶対に損しますって」

「……善処するわ…」

お姉ちゃんが殊勝なことを……

「それともう一つ、お守りとしての意味合いもあるみたい」

「「えっ？」」

「自信があるからって男の人にも平気で挑むって聞いたんで。

でも女の子なんだから何かあったら大変でしょ？ 気休め程度にでもなればって……あれ？ ……お姉さん？」

「ゆ、優子よ。いつまでお姉さんなのよ？ 吉井君のお姉さんじゃないし、何より同じ年でしょう？」

「あ、うん。解ったよ、ゆ、優子……な、なんか照れるね……」

「い、いいのよ。ああ、あ、明久君……」

「むっ……」

お姉ちゃんの顔が赤くなってる……よね？ ……というか、目の前で2人の空間を作らないでほしいな……

「安物ではあるんだけど、喜んでもらえたら、僕も嬉しいよ」

「「……ありがとう」」

「そろそろ切るよ。じゃあ、またね」

「「またね……」」

明久……本当に……、はあ……

「……やっぱり間違いなかったわね。明久君、魅力的だと思うわよ？」

「うう……、まあ……」

「秀吉が好きになった理由が解った気がする」

「お姉ちゃん、やっぱり！ 明久のこと……」

「まだ解らないわよ」

“まだ” ってことは、ゼロじゃない。少しは意識し始めたってことだよね……ライバルが増えた。まさか同じ人を好きになるなんて……うう……複雑。でも、好きな人の良さを解ってくれるのは嬉しいし、同じことで悩んで、相談して、相談されて、って好きな人のことを話せるのは嬉しい♪ そう考えると、自然と笑顔になった。

「どうしたの？」

「明久には、適わないなあって」

「ふふっ、かもね……」

「それと、お姉ちゃんの」

「姉妹「しまい」で良かった？」

「うん♪」

お姉ちゃんが背中を押してくれたし、明久ならば、信じられる。

だから、明久に伝えよう。この気持ちは、嘘偽りない気持ち。姫路や島田、お姉ちゃんにだって負けるつもりはない。譲らない、誰にも。明久待っててね？ 今日よりもっともっと、ドキドキしようね♪

（後書き）

優子まで明久の餌食に（笑）

このような作品ですが、楽しんでいただけましたら、幸いです。

また、お会い致しましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2777o/>

明久とわたし（ワシ）と初デート？

2010年10月16日00時58分発行